

配せられしより以來の罪人今在島の入數百五十人餘、此内四十人ほどは宇喜多の末裔島の産なり、

〔伊豆七島日記〕天、抑八丈島に船よすべき所た、二所あり、うしとらの方に有を神湊といひ、未申のかたに有を八重根といふ、そのうち神湊は舟のいでいり安ければ、そこに船をよせんとするに、沙あしくちからおよばで、八重根につく、常に島の浪のむつかしき事、是にてもしるべし、○中九日寛政八年五月は船ひきあげるとて濱邊に出て見るに、數百石を積ふねなれば、たやすくひきあくべきにあらず、村々より大勢を出して、かくらざとなんいへるものにて、聲々にはやしたて、拍子をそろへてひきあげるが、此島もとより五穀とほしくして、鹹草あしぐさと云ふものを、常に食とする故に、大かたはやせおとろひたるがほそきうでにちからこふいだして、ひきあぐるぞあわれなる、さて、鹹草は四季とも、有て、葉は常の食とする、根は三年をまちとりてくふとぞ、凡人の食に麥三四合を煮た、ちかし、湯の如くなりたる中へ、あした草をさはにきざみ入、潮水あるはゑんばいと云ものをうち入てくふ、○中かくまでからきすきはひなるが、みな長壽にて八十歳九十歳のもの、はめづらしとせず、百歳にも至ざれば、ながいきとはいはず、すべて病すくなし、島中一萬あまりの人なるが、盲人とては、壹人もなし、中風癩風いとまれなり、なしと云ても有、なんぞぞ聞る、また産かろくして、いにしへより、難産有事なしとぞ、島の風俗にて、血のけがれをいみにくむ事甚しく、里ごとにて、たやといふ家を作りおきて、月のさはりになりたる女は、そのたやに十二日の間ひきこして、けがれをさくる、又孕婦は、うみ月になれば、たやへゆきて、産をまつ、右にいへる如くに、難産はたえてなければ、みなやすくと産して、七夜を過れば、出生の兒をい、だきて家に歸る、かくの如くなるゆへに、家ごとに子ども多し、ことに多きは、十人より十五六人をうむといふ、能かんがへ思ふに、同じ人にて、かはりたること、わりの有べきにあらねども、先常